【オマ太宰】令嬢アユ

アサキタツナ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
【オマ太宰】令嬢アユ

【Ｎコード】
Ｎ２４８７Ｍ

【作者名】
アサキタツナ

【あらすじ】
【オマ太宰】とは、「オマージュシリーズ」の「太宰治編」です。太宰治の短編「令嬢アユ」の翻案、改作、二次創作です。恐れ多くも文豪の二次創作ですので、お怒りはせめて心のうちにしまっていただければ幸いです。しかし、恐いもの見たさと言う古葉がありますように、読んでいただければ幸いです。また、本家を知っている人、またはこれを読んで、こんな話太宰にあるかぁ！と思った方は、ぜひ本物の「令嬢アユ」で、お口（目）直しをお願いします。

（前書き）

太宰治「令嬢アユ」の翻案、二次創作です。本家とはやはり、雲泥の差で劣りますが、こういった作品も太宰にはあると知っていただければ、幸いです。

私には年の離れた、佐野君という友人がいる。具体的には、十一も離れている。兄ならばまだいいが、親子と勘違いされるというとても情けなくなる事態も度々ある。そのつど私はアンチエイジングのためのアイテムを買い込もうと思うのだが、なかなかそれをするのもばからしく思えて、時の流れに身を任せるのも悪くはないと自分に言い訳をする。

話を佐野君に戻そう。佐野君は大学の文学部に在籍しているが、私が見たところ成績は、下の下。よくぞ入学できたと思うほどだ。まさに少子化の恩恵を被った一人ではないかと疑いたくなるが、その彼が卒業間近で進路に悩んでいた。

私としては、進路よりも、卒業できるのかが気になったが、佐野君としては進路のことでひどく悩みたいようだ。

ある時、飲み屋で二人で飲んでいると、佐野君が突然叫んだ。

「小説家に、俺はなる！」

と、拳を振り上げて。その口調はまさに、某人気海賊漫画の主人公のようだが、

「がんばれよー」

と適当に相づちをかえして、私は鮎の塩焼きをほおばっていて。

それから数日後、佐野君から私宛に手紙が届いた。

何でも、伊豆に旅をしているらしい。そしてその手紙の中には『携帯電話は切ってあります。今風の作家と違い、私は万年筆と原稿用紙で勝負をしたいと思います』と書かれていた。

どうやら、宿にこもって、小説を執筆する気らしい。私は自分のパソコンを立ち上げて、インターネットの履歴を見てみた。彼がつい数日前、うちに来たときに熱心に旅行サイトを見ていたのを思い出した。

見慣れぬブックマークがあったので見てみると「連泊で大幅割引の宿」という特集が組まれているページだった。
最大で7泊できるので、どうやら一週間程度は、私も仕事に集中できそうだ。ということで、以前出版社から頼まれていた記事を書き始める。偶然にも、伊豆だった。私は彼を思い出しながら、じっくりと書き上げることができた。

数日後帰って来た佐野君は、自分で釣ったという、小さな鮎をお土産としてもっていた。そして、彼は開口一番、真顔でいった。
「恋をした！　結婚したい！」
と。

他人の恋愛にはさほど興味がない私ではあるが、彼があまりにも一方的に、情熱的に話してくるので、少しは真面目に聞いてやろうと思った。お決まりである酒を飲みながら、のシチュエーションのために秘蔵のウィスキー（と言っても安物だが）、ボウモアの１２年ものを彼に注いでやる。そして、彼は一気に飲み干した後、語りだした。どうでもいいことだが、酒に酔いながら、恋している自分に酔っている人間はどこまでも滑稽に見える。
佐野君によると、彼の恋は川から始まった。

落ち着いた宿で、渓流の流れが見える部屋という、物書きにはぴったり（佐野君曰く）の部屋で、机に向かって執筆を始める。
彼が宿に着いて初めてしたことであるが、如何せんこれが無理だった。彼には書きたいものも、訴えたいことも、また、誰かに伝えたい経験等もなかった。以前私から聞いた「私小説は自分の生活を切り売りして書くものだ」という言葉を思い出して、自分の人生を書こうと思ったらしいが、あまりに平凡すぎて挫折したらしい。だったら恋愛の話を、とも思ったが流行の草食系男子である佐野君には、恋愛の思い出などあるわけはなかった。

そして佐野君は出かけた。恋をするために？　いいや、違う。あくまで佐野君が恋に落ちたのは偶発的であり、全く意図しないことだったようだ。

彼が出かけた理由は、釣りに行くため。

渓流に釣り竿をたらし、思いを巡らすのは作家の勤めらしい。幸田露伴という昔の偉い作家も、言ったとか言わないとか。

まあ、そんなわけで、ぶっちゃけると彼は気分転換と作家っぽいからという理由で宿の近くの渓流に出かけた。

当然そんなまじめに釣る気はなかったので、釣果は案の定であったが、彼はそれでもよかった。はずだったが、さすがにこれでは何か腹立たしいと思ったらしく、渓流3日目にもなると、というか小説書けよと訴えたかったがそこはよしとしよう、彼はアユ釣りの道具一式をそろえて挑んでいた。当初は宿のレンタルで済ましていたが、自分が釣れないのは道具のせいだと思ったらしい。

そして、自慢の最新式の釣り道具で、釣りにいそしんでいるときに、彼女に出会ったらしい。

この釣り場で佐野君は自分以外の人を見たことはなかったので、釣り場に人がやってきたときは少し驚いた。その人影に八として振り向くと、さらに驚きがあった。

やってきたのはドレスのようなワンピースを身にまとった若い女性だ。バランスのとれた体に、まだあどけない少女のような顔、さらさらな黒いロングヘー、佐野君曰く「南アルプスの天然水」らしい。意味はわからない。

そして彼はあろう事か、ワンピースからすらりとのびた生足があまりにもこの場に不自然すぎて指をさしてしまったらしい。

「あ、先客ですか？」

少女が自分の持っている竿を見せながら、にこやかに笑った。

佐野君は指をさしたままだ。彼女が不思議な顔をするので、このままでは失礼にあたると思って、

「そんな軽装で、足に怪我でもしたら大変ですよ」
ともっともらしい言い訳をした。
「大丈夫ですよ、慣れていますから。それよりも、釣れてますか？」
少女は親しげに近づいて、佐野君のバケツをのぞいた。
小指ほどの魚が、２匹。こんなサイズでよくぞルアーにかかったと思える獲物だった。ある意味貴重かもしれない。
しかし、佐野君は見栄を張る。
「今日はこういう小さい魚を釣ってみたかったんですよ。これはこれで風情がありますからね」
などと、全く意味が分からないことを言った。少女は佐野君の釣り竿と、ルアーを確認した後、
「アユ用のルアーでこれを釣ったんですか？　よく釣れましたねぇ。あ、そういうことか」
何か思いついたように、少女が勝手に納得した。
「え？」
佐野君は素直にも、嘘がばれたかと動揺してすぐにリアクションを返す。
「いや、そのルアー、おかしいですよね。だからこういう小さいのも引っ掛けられるんですね」
もちろん、釣り初心者の彼に、ルアーが初期不良だったことを見抜けていたはずもなく、さらに言うとかなりの金額を払って買ったアイテムが初期不良だったとは、驚愕の事実だ。
佐野君は思わずルアーを急ぎ手に取ってみてみた。
「ふ、不良品だったのか……」
呆然としている佐野君を見て同情したのか、それとも釣り仲間は釣り仲間に寛大であるのか、彼女は微笑みながら、
「私、使わないルアーがあるので、これよかったら使ってください」
と、佐野君にか細い手で手渡した。突飛な事に佐野君も素直に礼を言う。
「ありがとうございます。ところであなたは地元の方ですか？」

「え、そうですけど？　どうして」
「いや、ええと――」
彼女に聞き返されて、佐野君は戸惑った。あまりにも奇麗で、この田舎にそぐわないという、褒め言葉を言うのが恥ずかしくも悔しくもあったのだ。佐野君が顔を赤くしていると、
「ここで暮らしていますよ」
と少し彼女も顔を赤らめながら、その場を去っていった。彼女がいつも釣りをしているというポイントに。
と、ここで彼が恋に落ちたのなら話は早いのだが、そうではないらしい。逆に馬鹿にされたと感じたらしい。まあ、彼が恋に落ちるタイミングなどどうでもいいが。
その後、彼女は佐野君の上流で釣りを始めた。いつも彼女が釣っているという、岩場の方で。佐野君からは死角に入る位置だ。
再び訪れた静寂の中で、自然を感じながら釣りをしていると、上流からジャボンという大きな音がした。何事かと見に行ってみると、少女が川に落ちて、胸まで水につかっていた。なんとか岸に這い上がった彼女は、小動物のように体を震わせて水気を飛ばそうとしていた。水にぬれたスカートが、両足にぴったりとくっついていた。
佐野君は内心「地元だからって、調子に乗るから」と思っていたらしい。うん、どうやら彼は相当に心が狭いらしい。しかし、少女の胸のあたりに赤い染みを見つけて、
「大変だ、血が！」
と胸を指した。
足の次は胸を指さすあたり、重ね重ね失礼なやつである。すると彼女は、自分の胸を見て、ドレスの胸ポケットから赤いボールペンを取り出した。
「あ、大丈夫です、これですから」
と彼女は笑ってみせた。佐野君はまたしても馬鹿にされたような心持ちがしたらしい。
その後、少女は自分の服が濡れて透けているので、下着のライン

が見えてしまっていることに気づくと、
「あんまり見ないでね」
といいながら、持ってきた道具を片付けて林の中へ消えていった。
それから数日間、佐野君が釣り場で彼女を見ることはなかった。
そして、佐野君が恋したのは、彼が伊豆から帰るその日だった。

宿でチェックアウトを終え、とりあえず土産を買おうととぼとぼ歩いているときに、その事件は起こった。そして、当然の事だが一応言っておくと、原稿は1ページもできていなかった。何をしにいったんだ、という突っ込みは無用だろう。なぜなら、いつもと違った場所でだらだらするために言ったのだから。
そして、佐野君は駅へ向かう途中の、例のアユ釣りの少女を見かけた。黄色いドレスを着て、自転車に乗って猛スピードで疾走していた。アヤメの花がかごには詰まっていた。
とりあえず向かっている令嬢アユに向かって、
「やあ、おはよう」
と挨拶をしたら、彼女もこちらに気づいたらしく、軽く頭を下げて去っていった。後ろ姿を追うと、彼女の背丈よりも高いアヤメが揺れているのが見えた。
その日の昼下がり、適当な土産物も見つかって駅へと向かっているときに、再びアユの少女に出会った。
「おかえりですか？」
と声をかけられたのだ。その少女の隣には、いかにも地元のおじさんと言った風貌の、線の細い気の弱そうな男がたっていた。手にはアヤメの花を持っている。
「どう、あれから釣れました？」
少女はからかうような口調で笑った。
「誰かさんが水に落ちてしまったので、魚がすべて逃げてしまったようで」

と佐野君もジョークと皮肉を込めて言い返した。
「水が濁ったんですね」
と彼女は低くつぶやいた。その間もおじさんはついてきた。ふと佐野君が、アヤメに目をやると、彼女は答えた。
「あ、この花はお供え物です」
彼女が答えると、おじさんが佐野君に向かって語りだした。
「うちの甥っ子が、もう亡くなってからだいぶたつんですが、交通事故でね。その命日にはこうやって花を供えるってこの子に話したら、朝から探してくれたんです」
おじさんは優しい目で彼女を見つめた。
「かわいがっていた甥っ子ですもんね。夕べは寂しがって、おじさんは泊まっていったけど、何も悪い事じゃないし。私はおじさんに元気になってもらいたかったから。それから、朝に花を探しにいっているときにあなたにあったの」
令嬢が利発そうにおじさんの次に説明すると、おじさんは恥ずかしそうに照れながら笑った。
「あなたの家は、民宿でもやっているの？」
何も知らない佐野君が訊くと、おじさんはますます顔を赤くして、令嬢と一緒に笑った。
それからしばらく歩き、駅の近くにくると、おじさんは立ち止まって静かに目を閉じた。令嬢は優しく肩に手をおいた。
「おじさん、しょげちゃ駄目よ。誰でも、みんな行くんだわ」
その言葉に、佐野君は無性に涙したくなった。
いい人だ。あの令嬢はいい人だ。佐野君は運命の人というのを初めて感じたらしい。

という事で、これが佐野君が恋をした話だ。ここまでならば、一夏の思い出話でいいのだが、その後がまずかった。
「でも、どこの誰か分からないだろう、そんなんじゃ無理だよ」
結婚したいという割には素性がいっさい分からないのも無理があ

る。そこで思いついたように、彼はポケットから大事そうに、実は、と前置きをして一枚の名刺を差し出した。
「彼女の名刺をもらったんだよ。何でもフリーで仕事してるらしく、先生なら何か知ってるかなと思って」
と、名前と連絡先しか載っていない名刺を差し出した。
こんなもんじゃ分かるわけがない、と思ったがなぜか名前に見覚えがあった。
「その子の顔とか分かる？」
嫌な思いが頭をよぎったが、それを確かめるために訊いてみた。
「あ、デジカメでこっそりと写真を撮ってあります」
と、デジカメを取り出したが、それは盗撮という気がする。どうせなら堂々と撮ればいいものを。
その画像を見た私は、偶然とは怖いなと思った。
「佐野君、私はこの子を知っているかもしれない」
「え、同じライター仲間ですか？」
「いや、そうじゃない。記事にしたんだよ、しかも最近伊豆の特集で。私の仕事は知っているね？」
「風俗ライター……え？」
「おじさんは、泊まった事を照れていただろう。実は伊豆に非合法で逆デリヘリをやっているって噂があってね。そのとき、参考資料にこの子が出ていたんだよ。もちろん、紙面では名前や写真は伏せるけど」
と言って、私は最近の仕事に使った資料から、令嬢アユと思わしき人物の部分だけを彼に見せた。
「ま、まさか。そういうことかぁ！」
と佐野君は拳をテーブルでどんどん叩いた。もう小説家になるしか、俺の生きる道はない。もう希望は奪われた。などとのたまっている。
しかし、話を聞く限り、本物の令嬢ではないにしろ、その子はいい子なのだろう。佐野君がそれでも付き合いたい、結婚したいと言

った反応を見せた場合、私は反対しただろう。やはり私は俗人だ、断固反対の姿勢しか思いつかない。

（後書き）

ぜひ、本家も読んでみてください。そして、太宰の巧みなストーリーテリングと、私の稚拙な文章技術を比較してみてください。
青空文庫にあります。
そうすれば、ええ、感想書く気もならないでしょう。
でも、そこをなんとか！！（笑）

この翻案、二次創作【オマ】シリーズ。
気が向いたらしばらく続けます。
古典文学を再発見していただけたら、幸いです。
近代文学（明治から戦後あたりまでの文学）って、いいものですね。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2487m/

【オマ太宰】令嬢アユ

2010年10月8日14時32分発行